ビバーグの研究

地上世界から
光の世に渡るには
ビバーグが
必要だ。

ビバーグに
いいのは、
自給村だと
おもう。

(1)　こころの側面から～

ビバーグってなんだ

ビバーグという考え方

大波乱のときが近づいています。

同じ気心を持った人が集まれば、人為的な組織は作られていなくても自動的に組織性が生まれます。思いそのものが、現象化を求めて人を動かすからです。

それぞれの人が、内側（心）からのサインに素直に従えば目的は実現します。これが本来の生き方であり、高次元世界の在り方です。

これから始まる混沌の時代に、意識をおなじくするものたちが、静かに寄り添うように点在して暮らすことで、ビバーグになっていく。

やがてくる光の世を迎えるには、ビバーグのときが、必要になります。

自給村の理想イメージを共有していく

放射能からの避難・移住は、もっともタイムリーな価値観の移行だったといえます。ただ、移住先でも周りの人全員が損得生活をしてしまっては、自我価値観に引き込まれます。

だから自給村を構想することが大切なのです。**最も重要になるのは共同体イメージの共有になります。**

個人の自我より、グループ全体の並列の心に意識をつないでおくことが基本になります。

並列組織の中での暮らし方ですが、全員が共通の共同体イメージを共有し、それぞれ自分の役どころを発見し自分がすべきと感じたことを行えばよいのです。

今までの会社生活のように、他人と優劣を比較することも、上司に意見を聞くこともありません。自分の心の反応に注意をはらうだけです。それでいて、全体としては過不足も重複も生じません。

共同体の先行例

美しい共同体「アーミッシュ」

やくざ帝国のアメリカ合衆国のなかにも、異端となる美しい共同体があります。「アーミッシュ」（プロテスタントの一派）です。

彼らの**信仰スタイルは美しい**。

彼らは合衆国の教育制度は拒否し、兵役義務も拒否（罰則の強制労働は受ける）、それでいて合衆国の社会インフラは利用しているので「寄生虫」という見方をする人もいます。普通なら排斥運動が起きてその国はいられなくなります。

ところが現実には黙認された形で拡大しています。

合衆国が排斥行為に出なかったのは、彼らの**質素で美しい暮らし方(信仰)にあるのかもしれません**。

「美術館の中でゴミのポイ捨ては出来ない」のです。

美しい共同体の、美しさは暴力にまさる力です。

ゴミが投げ込まれるのも、ヤクザに絡まれるのも、同じ波動部分があるからで、単にエネルギーの交流・反映が起きているに過ぎません（同じ周波数ならエネ ルギーは多い方から少ない方に移動する）。波動という面から考えれば、バリアを張ることは対立を生みます。優美な波動で段差を作っておけば、干渉されることもないで しょう。

信仰に生きる

波長が合うこと

自給村の雰囲気

ゆるやかな共同体の中核となるのは、発起人とその仲間の人です。この人数はコミュニティの方向性を決定します。5～6家族が適当でしょう。大変重要なメンバーです。

家族の個性（意識や価値観）を明確に表現しておけば、同じ個性の人は入りやすいし、異なる人は入れない空間となります。

発起人役の人がまず自分の個性を明確に表現し、その個性に響くひとが集まれば、自然発生的に同じ周波数の人が集まります。

その後に賛同する人たちは、周波数に共鳴して参加するわけです。心の傾向性の異なる人が参加することはありえません。

このようにして集まったグループでは、細かいルールがなくても秩序が保てます。また、その後一つの**グループ意識で生活する**ことへもつながって行きます。

結果的に、311原発事故は、「放射能からの安全、生命循環への畏敬、生命の尊重」という基本原則を明確にさせる効果がありました。

気心が合う人

共同体ってなんなの？

むずかしいことでなく、心の周波数が同じ人が集まったのが共同体です。自然に共同しあう生活になります。

私たちは、今までの教育や生活の中で、人が集まるには目的が必要だと思っていますが、これは自我世界を生きる場合のことです。

『役に立つ』『効率がいい』これは、獲得のための価値観です。

共同体は、会社などの利益目的ではありません。

では何で集まるのかということですが、ただ惹かれるままに集まるのです。波動（個性）にひかれるのです。

このようにして集まった関係においては、いつまでも一緒に居ても苦になりません。**そして、家族のように、与えてうれしいキモチになります。**

(会社や競争は、奪ってうれしいキモチだから、ダメなんです)。

自我って、なんだ？

手放しと移住

移住するということは、生きたまま『死と再生』をはたすことだと私は考えます。なぜなら、首都圏での結婚生活、住居生活、学校、人間関係など、培ってきたあらゆるものを手放さないと移住できないからです。

ご主人は離職にあたって、財産、地位、名誉・・・といった価値・物と決別しなければなりません。それらは、自我社会に所属するものですから、それと決別するということは自我を離れるということでもあります。ですから、男性が大泣きするのは当然のことです。(Kさんは移住にあたり大泣きした)。

財産、地位、名誉、お金・・・といったものを持っていけない旅立ち、どこかで聞いたような話と思いませんか。そうです。死んだ後、「三途の川」を渡るときに求められる作業です。それによって彼岸(集合意識の座)に帰れるのです。

共同生活を始めるために足かせとなるのは、自我意識が抜けないことです。自我意識は、われわれの競争社会、資本所有社会の原動力でした。人に勝つ、人より多くの稼ぎを得る、人よりもいいものを着る、人より美味しいものを食べる、人より早く着く、人より立派な人だと称賛される・・・・すべて、自我意識の産物です。それが残ったままだと、グループ意識には入っていけないのです。

自我意識を手放す

「我がつよい」といわれる、我とは自我のことです。

共同体の生活に入るということは、肉体を持ったまま「三途の川」を渡っているのとおなじです。つまり、この世の価値観を意識転換しないと、協働はできません。

放射能被害から避難するために徳島ではたくさんのボランティアが活躍しています。たとえば、◎ ◎ ◎の家の◎ ◎ ◎さんは、自我意識から避難母子の受入れをしているでしょうか？自我意識ではありません。「みんな家族」という意識です。

そのことを知っていれば、自我を手放すことに抵抗、葛藤がなくなります。子どもにはもともと自我意識が育っていないので、葛藤はありません。

男性は、そもそも経済社会そのものが自我意識そのものの奪い合いなので、この経済社会で有能であればあるほど自我意識を手放すことは困難でしょう。地位と実績のある男性は移住生活に障壁が高いといえます。

拡大家族って、なんだ？

拡大家族の考え方

自給型の生活を始めようとするなら、同じ考え方の人が集まって村を形成するのがよい。

自給の生活は、手間がかかり作業数が多いですから、大家族で協働することが必要になる。

ところが、今日の工業社会では核家族標準であり、高齢者も核家族化。このような単位では自給型の生活はできません。

ここに非血縁者で大家族（共同体）を作る必要が生まれてきます。10人ぐらいでは、社会機能は作りだせませんが、**数十人ぐらいならグループの中にある程度の社会機能も作りだせます。**

今の社会体制が破綻すれば必然的に共同体というものに機能がシフトするでしょう。

大家族（共同体）が動き出してしまえば、今までの個人（家族）のような区別はすたれていくでしょう。

相互扶助の考え方

農業については共同となりますと、個々の生活についても共同という考え方が生まれます。

現在、避難所として機能している「◎ ◎ ◎の家」を例にすれば、どこかの家族に急病の子が出て介護が必要になったときは、ひとりでに他の家族がサポートします。でも、都市生活にはそれはありえません。現代文明では個々の家の利害が分断されているからです。

冠婚葬祭の相互扶助のために、田舎には家を単位とした「講」があります。その管理が大変で、義理が優先することが煩わしいのも事実です。

今後、この課題を解決するのは拡大家族の意識転換です。**あの子もこの子も村の子であり、みんなで育てる。そういう拡大家族の概念**で、農業の共同化をおこなう。

また、そうやって分担していかなければ、石油エネルギーの枯渇していく時代には、個人の人力でやれることは限られてしまいます。

気心って、なんだ？

こころがまえ

1. 集まるべくして集まった、必然的な仲間だと思うこと。

この世の中には偶然のグループなど無く、必然の集まりです。必然の集まりなので大事にしないとね。

2. グループ意識を理解する。

個人単位から部族単位に、意識を拡大すること。

いままでの競争社会の価値観は捨てて、生命尊重、環境の循環を尊重することが大切。利己よりも、他に奉仕する喜びを会得すること。

もし、問題があれば話し合いをおこなう。

3. グループ意識から判断、行動する。

日常の判断のすべてを個人意識ではなくグループ意識から判断します。家族の中にあるとき、たいがいの人は家族という立場で判断している筈です。

食材を買う場合でも、家族全員が食べられるものを買うとか、専用で使う車であっても、家族全員が乗ることもあるので4ドアにしておこうとか・・・。これと同じことをグループという立場から行えば良い訳です。

グループ意識で生きる

まずもって、私たちは歴史的にも、自らの意志で共同グループを作ったことがありません。

共同体をつくるということは、意識の転換も求められます。私たちは個人の自由や権利を最大化させることが幸福だと洗脳されていますが、共同体を円滑に運営するためにはグループの人格を自分の人格として生きるということが求められます。

そのグループ意識のもととなるなかまを、他人と思えば一致もしません。家族と思うと、違いも気にならなくなります。

そのためには、理解説得もだいじですが、共感・共鳴という振動数の近さが、だいじです。

(2)　スピリチャルな切り口～

周波数とはなにか？

高い周波数

ホピの長老の言葉に「心の平和な人はすでに核シェルターの中にいる」というのがありますが、心の平和を実現することで高い周波数になっているから、災厄から守られるのでしょう。

さらに日月神示では「マコトでもって洗濯すれば霊化される、半霊半物質の世界に移行するのであるから、半霊半物の肉体とならねばならん、今のやり方ではどうにもならなくなるぞ(中略)原爆も水爆もビクともしない肉体となれるのであるぞ、今の物質でつくった何物にも影響されない新しき生命が生れつつあるのぞ」と、高周波数の肉体になったときの効果を述べています。

『旧約聖書』の「詩編」では、「たとい千人はあなたの傍らに倒れ、万人はあなたの右に倒れても、その災いはあなたに近づくことはない。あなたはただ、その目をもって見、悪しき者の報いを見るだけである。**あなたは主を避け所とし、いと高き者をすまいとしたので、災いはあなたに臨まず、悩みはあなたの天幕に、近づくことはない**」と信仰の道にある高周波数の様子を述べています。

自我を捨てれば、周波数が上がる

『ヒマラヤ聖者の生活探究』という本に「外は大変な嵐なのに、大師のテントの回りは風がおだやかであった」とか、遠距離の動向を居ながらにして見通したとか、肉体移動したなど、常識では理解できない記述がみられます。

さて、物質のエネルギー量という概念と、物質の振動数という概念は同じことを意味しています。エネルギー量が増えると振動数が高くなり、逆に振動数を高くすると共振によるエネルギー移動で、エネルギー量が増えるという関係にあるようです。

その精神世界の説くところによれば、宇宙はまず最もエネルギー量の高い世界（高次元の世界）が作られ、それから順に下位の世界が作られたことになっています。そのエーテル界を今の物質界にしたのは、人間の自我意識です。

この原理に従うなら、自我の念を捨てていけば、自己の周波数が上がり、エーテル界とかアストラル界が作られることになります。『ヒマラヤ聖者の生活探究』に出て来る大師たちは、**自我意識を消すことによって自分の肉体や周囲を高次元にしている**と考えれば不思議な現象も納得できます。

地球異変の原因

振動数が上がると分離が始まる

私たちが目にしている物質は、化学記号で示されるような単純な状態で存在するのではなく、様々な物質が化学的に絡まった状態になっています。

この絡まりの中から特定の物質を取り出すことを「精製」と言っています。簡単な精製は、**熱を加え分子の振動数を上げる**ことで出来ます。

例えば、サトウキビの液汁から砂糖を抽出する場合、液汁を煮るという方法を使います。煮ている中で、様々な物質の絡まりが解け、**不必要な物質がアクという形で表面に浮いてきます。**それを繰り返し取り除いていくと黒砂糖が出来上がります。

とにかく**分子の振動数を上昇させると混然一体のものが分離するという現象が起きます。**

地球の振動数が上がっている

今、地球に太陽エネルギーが降り注ぎ、物質の振動数が上昇してます。だから、サトウキビの精製と同じようなことが地球レベルで起きています。

地球が次元シフトするためには、その前段階として不要な物質の純化(精製と同じ意味)が必要であり、**地殻の変動、地軸の移動、火山の噴 火、地震、洪水などで、アクを出している**といえます。

物質次元の絡まりを解き、振動数の上昇に耐えられるものをより分けて上次元の世界を構成するのだといいます。

であるなら、われわれ人類も心の周波数によって、アクとそうでないものに精製されていきます。

だから、みたまを磨いて(心を洗濯して)周波数を高くするように意識した方がよいのです。

オクターブ上の周波数

物質が別のものに変わる？

活発な活動を続けている太陽から発せられているエネルギーにより、地上の原子核内部の振動数は上昇しています。

そして、**エネルギー量が一定のレベルを越えると原子の結晶体の構造、形態が変わり、別の性質を持つ物質に変化する**と言います。

私たちの知る範囲で、エネルギー量の違いで物質の特性が変わるという現象は「水」に見ることができます。水分子の熱エネルギー量(分子の振動数) が変化すると、固体、液体、気体に変化します。これに似たようなことが、原子レベル、素粒子レベルでも起きるということでしょう。

オクターブの世界

神智学では、宇宙は多次元であるといいます。フィジカル界、エーテル界、アストラル界、メンタル界･･･といった次元の異なる世界です。

多次元世界とは、物質の周波数の界層性だろうという説があります。

物質のエネルギー量が増え振動数が上昇することを表す日常的な現象は、弦楽器を考えればわかりやすいです。エネルギー量の多いきつく張った弦は、高い周波数 (振動数)で鳴ります。1つのオクターブを終えると、1段階上のオクターブが始まります。このオクターブの上昇を1つの次元上昇と考えることもできます。

きつく張った弦は、ゆるく張った弦よりモノを弾き飛ばす力が大きいです。これをエネルギー量が多いと考えます。

ふるい分け

分かれ道

預言・啓示では、地球が進化する時人類は二つに分かれると言っています。アメリカインディアンのホピ族の預言の石盤には、絵で二つの道が刻まれています。

モンロー研究所のリサーチはもっと具体的で、2020年頃の地球風景として、戦争で明け暮れる人達と、森の中に小さなコミュニティを作って平和に暮らす人達の二つの世界を見ています。

自我世界とは、今の文明社会の価値観そのものです。つまり、個人に基準を置き、知識偏重、モノカネ最優先、努力を強制し、利益や成果の拡大、他人との競争に明け暮れする世界です。「努力するのは人として当然。より多く稼ぎ、より豊かに消費し、より人生を楽しむことに何の文句があるのだ」という人は、自我世界にとどまらざるを得ない人です。

いっぽう、非自我世界という価値観があります。地球環境全体に意識基準を置き、すべての調和、平和、共同を受け入れる世界です。ネイティブインディアンもアイヌもアフリカの原住民も、自然環境を畏敬の目で仰ぎ、動植物を兄弟と呼んで大切にし、自己と他をおなじように大切にする部族社会を形成してきました。

自我世界は消滅する

しかし、自我世界と非自我世界の二つの世界がこれまでのようにずっと併存するわけではありません。

太陽エネルギーにより振動数は上昇しているのに、それを低い自我の周波数で縛るというのは、大変に不調和となります。

この不調和を表現する現象として、病気の急増、事故災害、戦争に巻き添えをくらうなどがあります。

ですから、ホピ族の預言の石盤に刻まれている二つの道の一つ(大地を離れた自我価値観の生き方)は、途中で消えています。

古い預言から、最近のチャネリングまで、新しくなった地球で暮らせる人口は少ないと言っています。多くは自ら肉体を去るのです。

自我と、大我

自給村は全体我

私たちは、頭（自我）を成長させ、それにつながっていることだけを強制され求められてきました。学校教育では記憶データの量を問われ、自我の自己主張能力を問われてきました。

現代人の99％はアンチキリスト（魂とつながっていない人間）でしょう。
頭の人格は宇宙意識とつながっていないので、どんなにすばらしい事を考えたとしても、宇宙からいえば破壊意識であって、行動すれば破壊行為となります。

また、頭の人格にどんな教育をほどこしても5次元振動に達することはありません。

地球はやがて5次元空間になります。頭で損得をかんがえる人格（自我）とつながった人は、この世での存在場所がなくなります。

命のある内に、意識を大我に向けて下さい。生を尊重する魂とつながっていれば、仮に肉体を失っても5次元地球の人間に仲間入りできます。（死後の行く先が大切）。

大我とは神様の意識

自給村の中は、頭の人格とのつながりを切りやすい場所です。個人を生きる暮らし方ではないので、頭の人格がしゃしゃりでることはありません。

常に全体のこと、全体にとって何が良いかだけを考えていればよいわけです。

全体に思いを向けることは、必然的に自分に向けている意識を切り離すことでもあります。**人間は同時に2方向に意識を向けることはできない**からです。

大我とは神様の意識です。5000年前の神の教え「バガバットギーター」では、**神に献身奉仕することこそ、最重要**といっています。そして、**神の御名をとなえることを最重視**しています。

これは、**人間は同時に2方向に意識を向けることはできない特性を見抜いており、とにかく神意識に集中することが、われわれの魂の旅路の秘訣である**ということです。

神とか信仰のたいせつさ

病気・ケガは、なぜ起きる？

信仰の道に入ると「大難が小難になる」と言います。『日月神示』では「・・・改心できれば大難が小難となるのぢゃ、やらねばならん、戦は碁・将棋くらいの戦で済むのぢゃ・・・」とあります。**信仰、改心というのは、自我意識（生まれてから築き上げて来た自分という人格）を無くすことです。**

また、「この道に入ると、損をしたり、病気になったり、怪我をすることがよくあるなれど、それは大難を小難にし、また、めぐりが一時に出て来てその借銭済しをやらせれているのぢゃ・・・」とあります。

現象（現実）はすべて魂意識が作り出しているものであって、魂の意図したことは絶対に止められないわけです。

そして、損・病気・ケガ・・・といった不都合な体験を現象化するのが自我意識と魂意識の「ズレ」です。

自我意識は調和的な魂意識と分離して「ズレ」ていますから、それを気付かせ修正するために不都合な体験をしているといえます。

安全をどうやって呼ぶか

集合意識は魂の意識です。しかし、自我意識は魂意識と一致しないわけですから、どんな建設的なことを考えようと、集合意識の側から言えば破壊者なのです。

例えば全員で農地を作ろうとしている時、一人その場所に生ゴミ用の穴を掘る人がいたなら、農地を作るという全体から言えば破壊です。魂意識と自我意識とはこのような関係だといえます。

肉体は魂（集合意識）に沿うようになっていますから、自我意識が強いと二つの振動を受けることになり不調和をきたし、病気をつくりやすくなります。また、意識は「波長共鳴の法則」が働きますから、自我意識が強いと破壊的な現象（事故、ケガ、自然災害・・・）に巻き込まれやすくなります。

以上の法則を知っておきますと、どうするのが安全につながるのかがわかります。**つまり自我で安全な方法を考えることではなく、自我意識を出さないことが最高の安全につながると言えるわけです。**

記憶と経験

自我とは、記憶倉庫である

高濃度の放射能が観測され、身辺に病気や死者が出ても、その事実を受け入れられず、対策を講じようともしないのはなぜでしょうか。

変化が急速なとき、記憶装置(自我)では解釈しきれなくなるのです。今、汚染拡大の中にありながらバラエティやスポーツに浮かれ続けているのも、そのような思考停止でしょう。

自我とは記憶体なのです。

今後、世界経済破綻や国家財政崩壊など、自我の記憶(認識)では対応できないようなことが次々に起きてくると、自我は不安・恐怖から古い記憶(古い価値、形式)に逃げ込み、固執するでしょう。これを防止する方法はありません。

それまでの生き方で、知識と感性の両方を使ってバランスよく受け入れるというクセがないため、記憶知識が全く役に立たなくなった時は、精神に異常をきたす人が続出するでしょう。

視野が広がるということの意味

人格とは単に経験によって構築された判断基準の主体であるといえます。物心着いてから経験してきたいいこと、いやなこと、評価されたこと、批判されたことなどの記憶によって、「こうすれば人に評価されるから得」とか「こうしたら人に批判されて損」とか、判断する基準が形成されます。

この損得を判断する主体が自我です。

だから、自我の人格は、いつも、損得の価値観でモノゴトを選択して判断して裁いています。この基準以外にも世の中にはたくさんの基準が存在するにもかかわらず、自我で生きる自己は、ワンパターンの基準しか見えていません。

このような人格が自給村にそのままシフトしても、個人的な価値観を振り回すだけで共同体としては衝突するだけです。結果、離脱していくことになります。

そうではなく、自給村全体のために、自我の狭い視野から、自給村の広い視野へと意識を拡大するのです。

視点をひとつ上げる

自我の枠を拡大してみる

しかし 自我意識を出さないというのは無理な話しです。そこで次善策として言えることは、自分よりもう一つ大きい人格で生きることです。

視点を一段上に持つと、より広い視野でみえます。

例えば、家庭を持っている人なら、常に家族の枠で考えるのです。中小企業のオーナー社長は、たいがい会社人格で生きています。

自給村に暮らす場合は、意識枠の拡大が容易になります。共同体は元々自我人格を使わない世界ですから。

自給村は安全

グループ意識でくらす共同体を作ったなら、どんな天変地異が起きようと大きな被害は受けないかもしれません。

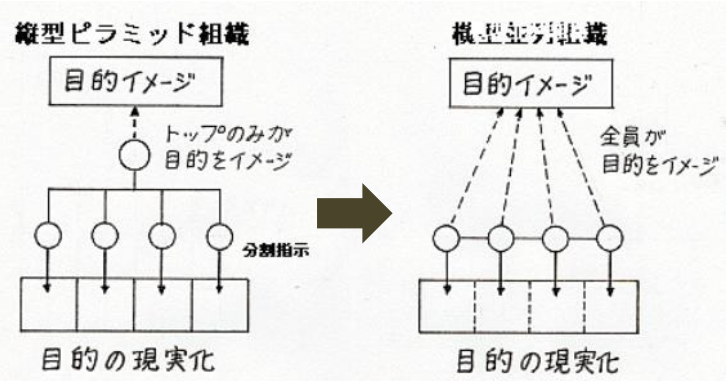
ノアの家族は、方舟によって助かったのではなく、意識振動数によって助かったのだといえるでしょう。

意識の高さ

自給村は自分の意識で動く

共同体は、家庭の拡大したものと考えればよいでしょう。家族が企業などと大きく異なる点は、目的性が単一でないということです。世代交代のための装置、日常の相互扶助、生活上の経済合理、精神の安定装置、・・・といったようにいくつもの目的性を持っています。近隣との良好な人間関係なども補足的な目的となります。

このように沢山の目的性を持った集団は、上から下へ指示するというタテ型の組織を組むことはできません。メンバーの一人一人の意識により動いていく組織です。



自給村は専業制をとらない

家庭や共同体は専門家を作ってはいけない集団です。家庭で説明しますと、主人は外に出て現金を稼ぎ、妻は家事といったように分業化（専業化）してしまうと、どちらかが病気になったりすると家庭は機能しなくなります。

共同体も同じで、心の通じないものを技能だけでメンバーにすると、やがて全体が壊れてしまいます。

共同体も専業制を取ってはいけません。**全員が何でもできる、ピンチヒッターにたてる柔軟な集団であるべき**です。

手の空いている人、気がついた人が処理していくことになります。

(3)　くらし方～

現時点でのくらし

兼業で外貨を得る

●第二種兼業農家スタイル

これは勤労生活（現金生活）が主体になっており、補助的に農作物を自給する生活スタイル。元々農家であった人が、戦後の高度成長の中で勤労者になった結果生まれた。

●第一種兼業農家スタイル

これは、自給生活を基本にし補助的に出稼ぎやアルバイトなどで現金収入を得る生活スタイル。秋の収穫が終わると、主人が左官、大工、など職人として出稼ぎに行くスタイル。多くは都市に移住することになりました（過疎の一つの原因）。

●半農半Xスタイル

今、都市の人が求めている自給型生活とか、半農半Xとかいう生活 。

交易

●まだ、市場経済に依存しなければ暮らせない

一人一人外貨を稼ぎ、都市の商品を買っている。
安全な農産物を関東の都市に宅配する方法など。

資本主義観念の卒業を視野に

事業は、経済合理の上に成り立ちます。儲かることが是なのです。だから、儲けのために環境を破壊し、賄賂を駆使し、産地偽装や誇大コマーシャルなど詐欺まがいのダマシで国民を欺いてきました。

その反面で、基準に満たないもの、目的に沿わないものは切って行くところに成立します。末端労働者を高濃度放射線の中に入れる危険作業に従事させて使い捨てにしてきました。

資本主義とは摂理を離れた人為的な世界です。共同体とはまったく矛盾する形態です。

体制破綻後のくらし

●専業農家スタイル（完全自給生活）

家族だけで完全自給型の暮らし方をするには、**家族人数が10人ぐらいは必要です。しかも、そういう暮らし方をする人だけでゆるやかな村を作る必要があります。**

家族内では処理出来ない事は、他の家族と協力して行う必要があり、そのためには、同じような暮らし方をする人が周囲にいなければなりません。

混沌の時代を信仰を中心に据えて静かに目立たぬように暮らす。そのとき、精神的にささえ合うこともたいせつです。

そのためには、徒歩圏内に気心の合うなかまが点在していると、心強いものです。週末に寄り合いをして、励まし合うこともたいせつです。

●自給村の市場経済

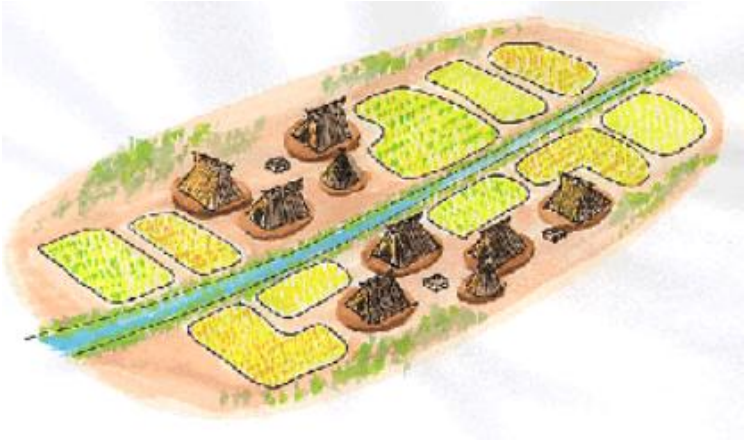
外貨を得た人は、地域内の商品を買う。
「地産地消」というのは、衣食住のすべてを地域内で調達すること。体制破綻後は、地域のなかですべてが完結するようになる。ゆえに、地域の福祉に貢献しない自我の意識では、生きるのがつらくなる。

農地と家の距離について

「移住者は一般に、まず家を決めて（借家などを見つけて）、その後で農地を探しているが、これは全く逆で、先ず農地を決めてその一角に住居を作るべし」

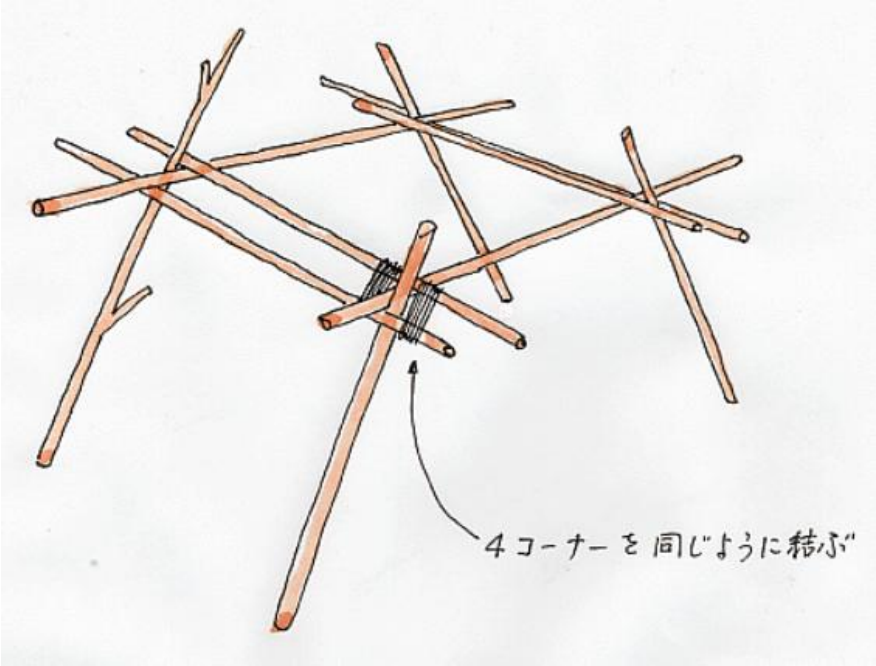
「飛び地となる肥えた農地より、やせていても目の前にある農地の方が、すべてにおいて効率的だ」

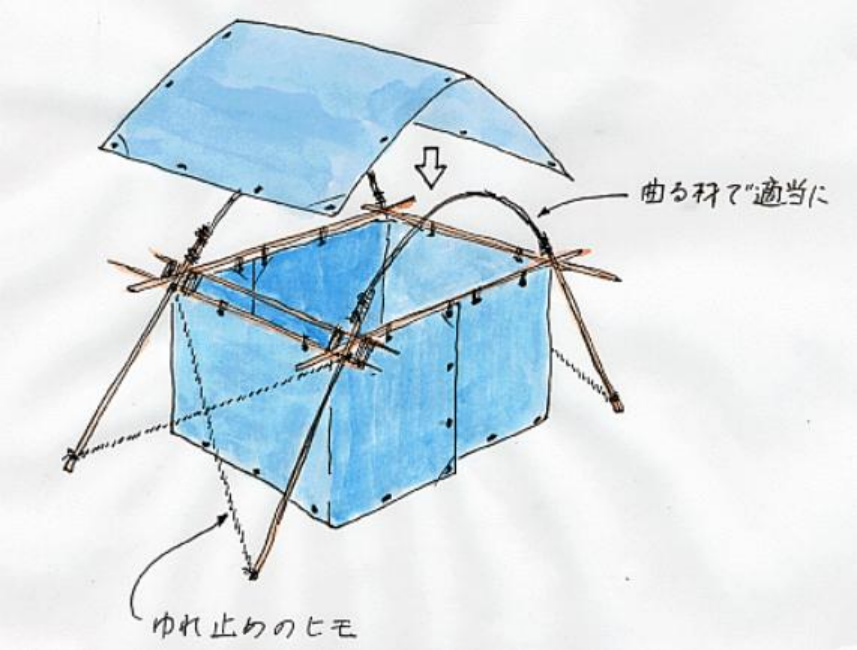
「地続き」の土地優先で考えていくと、住居を自分の手で造れるということがポイントになってきます。



技術も道具もいらない避難小屋の作り方

一番簡単な方法を図解しておきます。この木組を知っておけば、万一の場合でも雨露をしのぐことができます。見かけの何倍も丈夫で、ハンモックを使うことも出来ます。その方がさらに安定するといった構造です。





＜必要な材料＞
1. 棒材(2.5m～3.5m)10本。サイズは不揃いでもよい
2. ヒモ(綿ロープ、ビニール・ロープ)
3. ブルーシート　3～4枚

今のうちに、ブルーシート3～4枚とヒモを用意しておいて下さい。どちらもかさばるものではありません。ひとたび災害が発生すると、そういうものは全く手に入らなくなります。

千歯こぎ

雑穀類（粟、ヒエ、キビ・・・）を自家消費用に作るなら（水田がない場合で畑で穀類を作ろうとするなら）、「千歯こぎ」が必要になります。

穀類を食べようとすると本当に手間がかかります。イモだと全く道具が必要ありません。皮をむく包丁があれば十分です。

糞尿の循環

肉食をしないなら、大便はそのまま土に返せます。毎日オマルに用を足して、毎日少しずつ異なる位置に埋めていけばOKです。半年ぐらいで最初の位置に埋 めても大丈夫です。自然の浄化力（微生物による分解）で、土に還っています。100パーセントエリア内還元です。

オマルを使うと住居がシンプルな構造になり、また住居の寿命も長くなります。家の寿命を縮めている一番の原因は、室内の固定風呂、二番目がトイレです。

オマル方式にすると、家は屋根と壁があればよいことになります。ちなみに寝殿造りの住居に暮らした平安貴族もトイレはオマルです。

今後の安心のためには、「野菜の種」なども買っておくべきです。「種」は、すぐに増産できるものではないので、店頭からなくなるとそれで終わりです。

ローテクに戻る

「都市型の消費生活はやめよう！」と決めることです。

さらに脱石油時代を想定して、昭和初期のローテクを復活させる。これにより、社会的な大異変をなんなく乗りこえることができるでしょう。

伝統行事の神秘

脱肥料のユニークな方法

植物を育てるための少し変わった方法を紹介します。

これは古くからハンガリーあたりで行われている方法ですが、農地に入って合唱するのです。しかも不協和音が良いと言います。これによって30パーセント収量が増えるとか。

韓国では、水田の回りを鐘を叩いて歩くということをやっていました。やはり収量に関係するとのことです。

日本でも「亥の子」という農業行事があって秋の夕刻、稲束（ナワでぐるぐる巻く）で道を打ながら村の中を回るという行事があります。虫よけの行事と聞いたことがありますが、どういう因果関係があるのかよくわかりませんが、とにかく植物がよく育つらしいです。

また、植物は愛情で育つとも聞きます。フィンド・ホーンの農業はそういうことを基本にしています。『フィンド・ホーンの魔法』には、「植物の回りで子供たちが遊ぶのも成長に効果がある」とも書いてあります。子供の遊びは無邪気であって、自我波動が出ていません。愛情の中にも自我波動はありません。このような事から自我波動を浴びせなければ植物は育つとも言えそうです。

石川県・能登の虫送り

虫送りとは日本の伝統行事のひとつで、農作物の害虫を駆逐し、その年の豊作を祈願する目的で行われます。

「どろむしや～出ていけ～！」とみんなで言いながら田んぼのあぜ道を歩いていきます。

霊的に進化していた原初の人達
究極のコミュニティ(アマゾンの「ヤノマミ族」の生活)

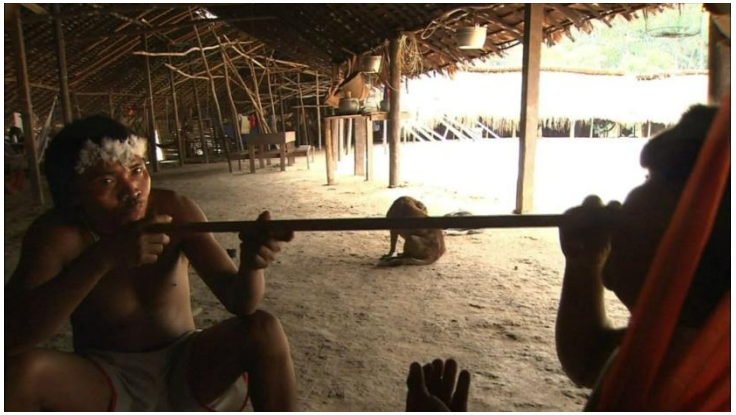
ヤノマミ族をご紹介します。この集合建物を「シャノボ」というのですが、この中に20家族前後、70～100人くらいが暮らしています。

ヤノマミ族が、仕切り壁のない円形の集合住宅でやっていけるのは、仕切り壁を作らない暮らし方をしているからです。私たちは、仕切り壁がなければ暮らせないでしょうし、バラックでは耐えられないでしょう。これは、自我意識の強さに関係しています。見られて恥ずかしいと思うのは、自我意識です。

『旧約聖書』、エデンの園の章で、この章は集合意識(7～8ヘルツの意識)の中にいるときの生活を説明しているのですが、「・・・人とその妻は二人とも裸であったが、恥ずかしいとは思わなかった」とあります。

それが、楽園喪失の章になると、この章では自我(個我)意識(20～30ヘルツの意識)に落ちた世界を説明しているのですが、ここでは、「・・・すると、二人の目があいて、彼らは自分達が裸であることを知った。そこで彼らはイチジクの葉をつづって腰に巻いた」とあります。「創世記」の話は、人間の意識 変化を大変わかりやすく説明していると思っています。

ヤマノミ族が、仕切り壁のない住居で生活できるのは、自我意識が弱く、ほとんどグループ意識(地球集合意識の近い所にある小集合意識)の中にいるからだと思います。



大自然を前にして、人権などの近代観念は、ただの価値観に過ぎないということを思い知らされます。

◆外圧状況・生活環境

ヤノマミ族は、南米アマゾンの熱帯雨林（年間を通じ温暖で雨量が多い）から、オリノコ川にかけて居住しています。シャボノと呼ばれる大きな木造藁葺き屋根のドーナツ型住居（中央広場のある形状）で、150人程度の集団を成し生活しています。シャボノには、家族単位で囲炉裏が置かれ、彼ら、各々の居場 所があります。隣接する家族間や内外との間仕切り壁は一切無く、天候（自然環境）や集団内の様子（共認域）が常にわかる居住環境となっています。住居内の人数が増えると分派することがあるようです。

生産様式は主に狩猟・採集。狩猟は男達が担います。狩猟の際は、全員で（女達や子ども達も含めて）キャンプ地に移動。野ブタやサルなどを弓矢で狩ります。男は狩りを成し遂げることで一人前と認められます。獲物を一撃で仕留めるため、矢には毒が塗られていました。女達は川で魚を捕ることもあります。魚 は川に毒を混ぜ、痺れて浮いたところを捕獲するようです。彼らはアマゾン内の**毒草・薬草を熟知しており、獲物の居場所や狩猟法など、高度な観念体系を持っ**ていました。木の実や昆虫(蜂蜜)の採集。イモの栽培も一部行われているようです。

婚姻様式は一夫一婦。ただし、ある若い女性は複数の男達と交わっていたことが確認されています。狩猟生産であり、祭りの様子からは、男への評価ヒエラルキーが一定存在することもわかりました。基本は総偶婚で、男は勇士に限られる状況でしょうか。条件はわかりませんでしたが、集団内の規範（育児や年齢 など？）により、やがて夫婦となるようです。

◆生死は女性が決める

母の胎内に宿る命は精霊だと、ヤノマミ族は言います。また人は死ぬと、森に息づく小さな生命＝昆虫へと生まれ変わり、消えて自然と一体になると考えています。万物は精霊によって成り立っている。それがヤノマミ族の生命観です。

生まれたばかりの赤ちゃんは、まだ精霊と考えられています。精霊のまま天に返すか、人としてこの世に留めるか、赤ちゃんの生死は、その母親が決めます。

産気づいた女性が、他の複数の女達と一緒に森に入っていきました。森を食べ、森に食べられて、命をつないできた彼らにとって、生と死は森にあるのです。彼女は森の中で赤ちゃんを産みました。へその緒がまだ付いた白く小さな体の赤ちゃんが、大きな葉の上に無造作に置かれています。産んだ母親は、胎盤を 葉で包み、シロアリの巣へ入れます。そして葉の上に寝かされた赤ちゃんを抱いたとき、精霊は子どもとして受け入れられます。村に連れ帰った母親は、その人 生をかけ、子どもを育てます。

赤ちゃんは、天に返されることもあります。その遺体は葉に包まれ、シロアリの巣に入れられます。精霊は天に、肉体は森に返されるのです。ヤノマミ族は1集団で150人程度。年間の出産は20人。内、半数以上が天に返されるようです。

男達は、出産の場や、その行為に一切係わりません。女性が赤ちゃんを連れて帰ってきても、一人で帰ってきても、何も言わないし、何も聞きません。関心すら示さないようにしているかのようです。女性の判断を信じ、生死の場、全てを女性に委ねていました。みんなと共に生き、みんなと意識が合っているからこそ、女性は子どもの生死を判断できます。また**女性が「育てる」と一度決めた以上は、集団の男達全員で守っていく**のでしょう。何も聞かない男達の背中からは、そのような大きな意志が感じられました。

生死を前にしたときの彼らの様子は、日常的で、どこか達観した印象すら受けました。しかしそれは、抗うことのできない自然を前に、全てを受け入れ適応していく、命の逞しさなのかもしれません。

悩みごとの共有

スウェットロッヂ

私は3度体験したが、インディアンの儀式にスウェットロッヂというものがあります。

スウェットロッジとは、ネイティブアメリカン・ラコタ族に伝わる儀式です。文字通り、「汗の小屋」という意味ですが、ラコタ語では「イニーピー」といいます。「子宮回帰」を意味します。母なる大地の子宮であるロッジ、そこは、身体、精神、魂を浄化する聖なる空間であり、祈りの場所です。

一晩中、テントのなかで高温ミストサウナ状態をつくだし、真っ暗ななかで自己の悩みを神に告白し共有します。このなかでメンバーと神との結びつきを確認して、浄化を実現します。

悩みごとの共有

大人会議

すでにエコビレッジ活動を軌道に乗せている例として、富士山の麓で有機農業をベースにした自給自足の生活を送る「木の花ファミリー」が有名です。

血縁を超える50名以上が共に暮らす農的共同体です。

このつながりを確かめる場が、夜の「大人会議」だといわれます。

古田:「大 人会議」は、この15年間一日も欠かしたことがないんです。昼間は農作業で土地を耕し、夜は「大人会議」で心を耕す。我々の暮らしの中で最も大切な部分で す。共同体を作ろうという中では、主義主張が対立を生みます。理想を持っていればいるほど、諍い(いさかい)も生まれます。そこで、話し合うことを始めた んです。そして議論はしない。議論とは、自分の意見を通したい人がやることなんです。

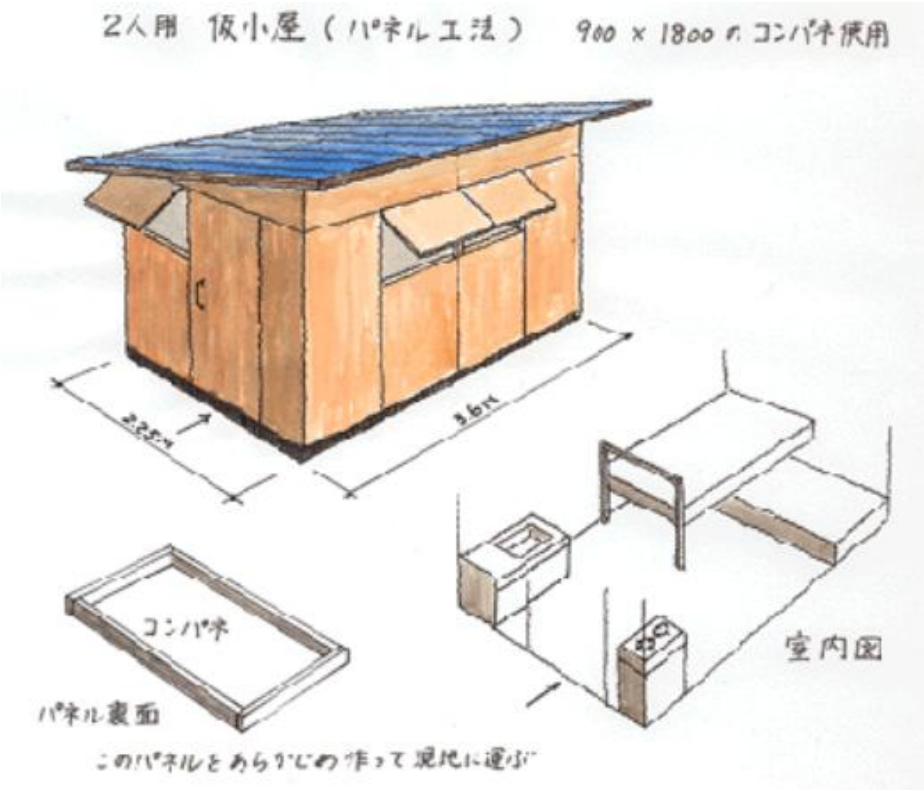
古田:「大人会議」では、意見のある人が自分の意見を出し合う。その上で「ここにとって一番いい方法は何だろう」ということを話し合うんです。その中でエゴや対立が取れていきます。

私的悩みの共有

伝え聞くところでは、私的な悩みや悪いクセなども、なかまと共有しているらしい。なかまが、助言したり、いっしょに考えたりして、切磋琢磨しているらしい。ただ、なにもかも理想どおりにはいかないのも事実だろう。

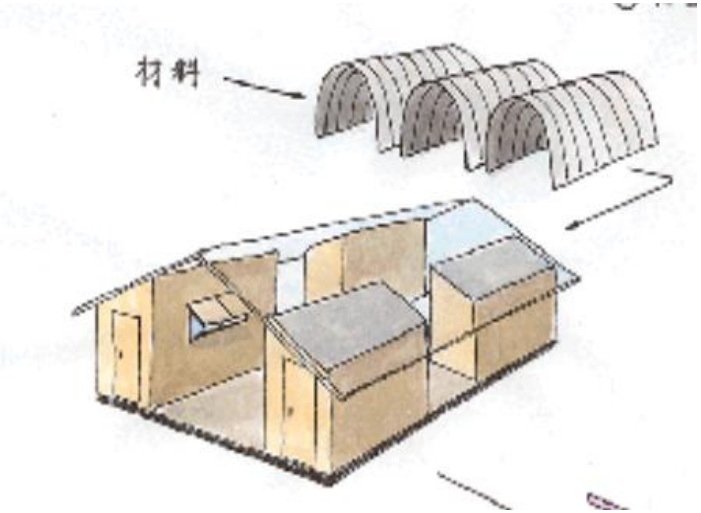
家を建てる

材料費は10万円程度、組み立ては1日でOKというものです。パネル方式で、ホームセンターなどで材料を買い、そこで下加工し、軽トラックで現地に運んで行けば、その日のうちに組み立て可能というものです。
これは将来的には物置小屋として使います。



合板を使うので施工中に雨対策が必要（ブルーシートで被うなど）。

この仮小屋は、単独で使うのではなく、偶数個を向かい合わせに建てて、中間部を作業スペースとして使うようにプランしたものです。



もっと簡単に「仮小屋」を作る方法としては、ジャバラ式の骨組を作っておいて、現地で伸ばしてブルーシートで被って完了という方法もあります。モンゴルの「パオ」のようなスタイルです。

アーチ状に曲げたパイプを連ね、ビニールシートで被った簡易車庫がありますが、気候のよい時期ならそういうものも仮小屋に出来ます。

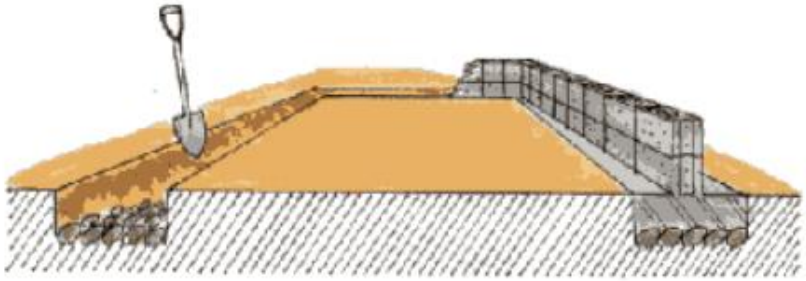
小屋の基礎

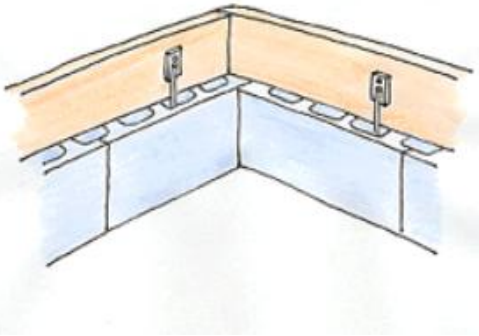
簡易住宅は、ブロック基礎を想定しています。コンクリートは、溝を掘った部分に入れます。正式な布基礎の半分ぐらいの量ですみますから、コンクリート・ミキサーを使わず、手練りでも作業ができます。

ベースコンクリートが乾いてから、上図右側のようにコンクリート・ブロックを積みます。コンクリート・ブロックは、吸水性が高いので基礎材には向いてい ない(土台が腐りやすい)と言われているのですが、私の隣の家は、ブロック基礎で40年間耐えていますから、簡易住宅の場合問題ないと思っています。

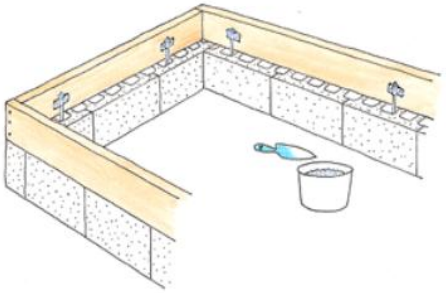
簡易住宅仁慶プラン(7坪)の基礎コストですが、正式な布基礎を業者に作ってもらうと、車の乗り入れが出来、水があるという条件 で、50～70万円ぐらいでしょうか。ブロック基礎手作りなら、スコップ、トロ箱(コンクリートを練る箱)などの道具費を入れても10万円の予算で可能と思います。

＜ブロック簡易布基礎＞





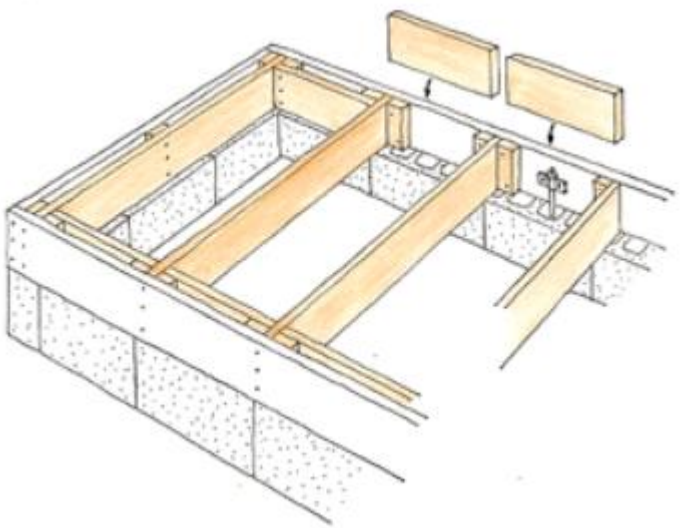
これはブロック基礎に土台（横木）を固定するための方法です。
プロック基礎が完成したら単に土台材をのせて行くだけです。その後で下図のようにブロック穴のある所に羽子板ボルトを取り付けます。そしてその後で穴にモルタルを流し込みます。これは園芸用の移植ゴテなどを使います。後はモルタルが固まるのを２～３日待つだけです。



床をはる

アンカーボルトのところに埋め込んだモルタルが完全に固まってから内側の土台材を取り付けます。まず外側の材にスペーサー（2バイ6材を10センチ幅ぐらいでカットしたもの）を図のようにビス止めします。内側の土台材、床材はそのスペーサーにビス止めする形になります。

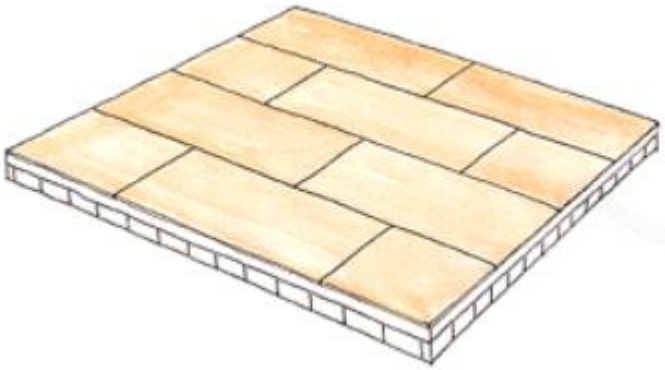
図を見れば解りやすいと思いますが、床材の間隔は一定ですから、それの邪魔にならない所にアンカーボルトを取り付けておく必要があります。アンカーボルト幅は1.5～2メートルぐらいで、その間の適当な位置にあれば機能を果たします。床組が完了してから、アンカーボルトのナットをボックスレンチで締めます。これで土台兼床組は完成です。



床組が終わったら、次ぎに床板を張っていく工法（2バイ4工法など）と、床板は後にして先に壁を作っていく工法とがあります。どちらも一長一短があります。

2バイ4工法のように、先に床板を張ってしまうと、そこが作業台として使えますから、その後の作業がやりやすくなるのですが、今日のように合板を張るとその後屋根がつくまで、毎日雨対策のブルーシートをセットする作業が出て来ます。また、床板の上に壁パネルを乗せることになりますから、その後、床板の取り替えが出来ない構造になります。

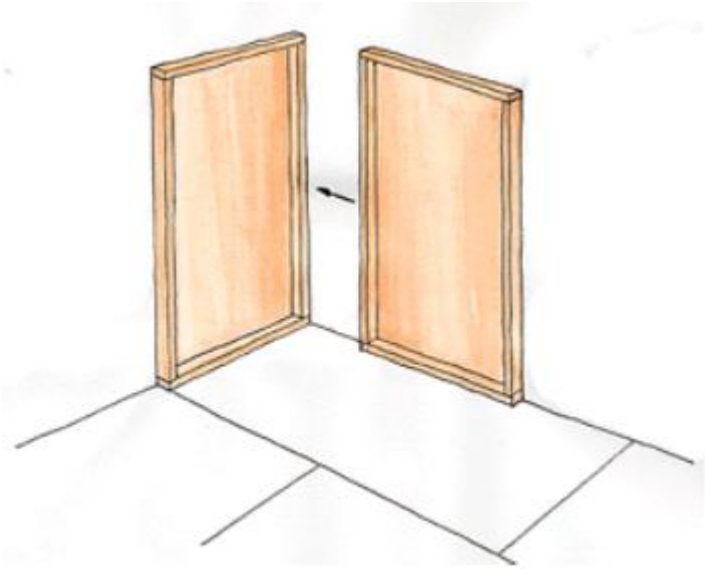
床を後で張る工法は、先の裏返しで、作業はやりにくいけれど、雨対策に神経質になることはありませんし、20年後、30年後でも床板の張り替えが可能になります。



パネルをたてる

パネル工法では、四隅については910×2440のパネルを使います。このパネルは壁面の垂直を決定する基準になりますから、精度はは高いほどよく作業場で予め作っておきます。

中間部のパネルで、掃き出し部分（2枚の引き違い建て具を入れる部分）は、大きなサイズになりますから、現場（床組をした上）で、製作した方が楽でしょう。小窓の入るパネルはケースバイケースです。



床組が終わったら、次ぎに床板を張っていく工法（2バイ4工法など）と、床板は後にして先に壁を作っていく工法とがあります。どちらも一長一短があります。

2バイ4工法のように、先に床板を張ってしまうと、そこが作業台として使えますから、その後の作業がやりやすくなるのですが、今日のように合板を張るとその後屋根がつくまで、毎日雨対策のブルーシートをセットする作業が出て来ます。また、床板の上に壁パネルを乗せることになりますから、その後、床板の取り替えが出来ない構造になります。

床を後で張る工法は、先の裏返しで、作業はやりにくいけれど、雨対策に神経質になることはありませんし、20年後、30年後でも床板の張り替えが可能になります。

(4)　体制の崩壊～

就農への背景

家制度がなくなった

明治大正時代には「家」制度が法文化され、「家」に帰属して生活が保証されてきました。

戦後は新民法になり、「家」制度はなくなりましたが、習慣的な「家」制度は続き、仕事を失った時などは、家族が丸ごと実家に帰り農業 などを手伝い、景気がよくなるとまた都市に出て行くようなことをしていました。昭和40年代ぐらいまでは、失業をしてもホームレスということにはなっていませんでした。

都市化が進み、企業が「家」制度に変わって生活保障をするようになりました。終身雇用で、失業してもすぐ別の会社が見つかりました。

バブル経済が破綻し、新自由主義で弱肉強食が世界的にひろがると、企業は公然とリストラをしました。もはや会社も殺伐として、都市にはホームレスと自殺者があふれています。

ミスマッチ

現代社会では生産力を持たない人々が5000万人以上存在します。しかし、そのひとたちが自給村を志し、また、理念に共鳴するかというと、別問題です。

ニート・フリーター（500万人）	すでに中年以降の生活がない
ワーキングプアー（400万世帯）	暮らし方を変えるのも方法
低額年金受給者（500万人以上）	節約だけでは対応できない
過疎地域の人（750万人）	経済効率の良い暮らし方が必要
生涯単身者（23%、3千万人）	晩年は一人では暮らせない
その他（様々な弱者500万人）	

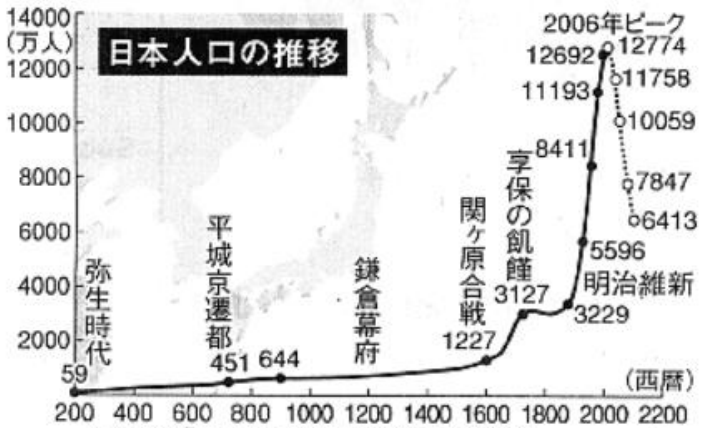
条件だけで、器に押し込んでも、うまく機能しません。

意識の目覚めた人が農業を助け合って取り組むというのは、このような背景からも必要になります。

体制の破綻

国家財政は破綻するしかない

政府の会計制度、教育制度、農業制度、年金や介護保険などの福祉制度、その他もろもろの国家制度は、人口の増加期に作られたものです。人口の増加、経済の拡大が前提になっています。そのために、人口の減少期に入ると維持が難しくなります。



(鬼頭宏「人口から読む日本の歴史」(2000)、総務省「国勢調査」、国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口(2002年1月推計)」から作成)

しかし、政府は官僚のエゴとして、保身、すなわち制度を必死で守ろうとします。少なくなっていく人口、縮小していく経済の中で、人口増加と経済拡大を前提にした制度を守るということは、増税につぐ増税で結局は破綻で終わるしかありません。制度がお金を食いつくし財政を破綻させます。

放射能を隠蔽する国家

政府が、保身、すなわち制度を必死で守るという決意は、福島の20キロ圏内の指定にも現れています。30キロにすれば、東北自動車道・東北新幹線がかかってしまい、経済的な損失がひどくなるのでできなかったのです。

福島県と政府が福島には放射能の被害はないと言い続けているのは、汚染被害を認めてしまうと土地価格が下落し、資本主義の土地本位制度が崩壊するからです。

大飯再稼働も関西電力が赤字倒産しないために、ウラン燃料を会計年度内で使用するためです。

除染は帰還を早くして補償を出さなくてすむようにですし、そもそも除染請け負いのゼネコンは原発をつくった建設会社です。

このように、国家は放射能を経済の視点でしかみていません。放射能で確実に病気と死へ追いやられる国民や子どもの生命保護についての視点は皆無です。

こうした保身の制度構築と制度運営は、国家のあり方を事実に立脚した生命尊重の方向に行かせることなく、国民の死者数の莫大な増大と、それにともなう医療費増大、また制度維持の不可能へと確実に向かいます。

つまり、我が日本国家は自滅するしか道がありません。

絶望しかないのか

資本主義の後

今の資本主義体制がうまく機能しなくなったとき、次にくる主義体制があるかといえば、何もありません。今さら共産主義体制はないでしょう。資本主義体制が崩れた後は、国家を一つで包み込むような主義体制は無いといってもよいと思います。

ポスト資本主義の一つと考えられているのが、インドの哲学者P・サーカー氏の提唱した『プラウト』(「進歩的活用論」1959年)です。

この思想は、「社会の最小単位を個人に置くのではなく、自給自立できる共同体を社会の最小単位とする社会システム」です。同じシステムを「プラウト」以前に、大本数の出口王仁三郎氏が「国家構想論」として語っています。

彼らの思想は、キリスト教メノー派のアーミッシュの人たちが実践している暮らし方とおなじです。

中央集権国家はなぜ滅亡するのか

明治以来わが国がつくってきたのは中央集権の、専門分化国家でした。国家という大きな単位で諸外国と国富を争い自立する方法を選択したからです。この方法は大変効率のよい在り方ですが、すべての人が部分の専門家となり、個人として地球に自立する能力を持っていないので、全体(国家体制)が崩れると全員生活不能者となってしまうからです。

私たちが、全体の成り行きに影響されない暮らしをしようと思うなら、全体体制に部分として組み込まれない暮らし方を作り出す必要があります。

このことは、東日本の放射能汚染にも言えます。国家は放射能の害は無いと言い続け、いっこうに国家システムを変更する気がありません。そのうち、乳幼児から健康被害が出て取り返しのつかない大量死に巻き込まれます。

国家の全体的な動向に巻き込まれず、放射能から安全な土地で、農業自立の暮らし方に入って行ったなら、体制の動きに一喜一憂することなく生きてゆけます。

絶望しかないのか

世界金融破綻のあと

ユーロ加盟国のギリシアが財政破綻すれば、銀行が連鎖倒産して、ユーロも崩壊するという見込みが語られています。いまや、スペイン、イタリアなどより経済規模の大きな国も財政破綻寸前で、その危惧は日本の財政にも向けられています。

もし、どこかで国家財政破綻が起きれば、世界同時に信用不安が連鎖するでしょう。

これにより、貨幣の信用が低下し、結果、ハイパーインフレになるとの見込みがあります。国の通貨は対外的な価値を失います（為替レートは大幅安になります）。したがって輸入品（日本の場合は、石油、食糧、資材など）は高価なものになります。また年金制度は崩壊します。制度は残っても実質がありません。

これを前提に考えた時、国家の立て直しにおいて、以前の体制の再構築は考えられません。食糧自給率40%の国で（世界に例がない）、通貨が暴落すれば食糧が買えなくなるので、東京など人の住める所ではなくなります。政府は借金の原資がなくなりますから、国家予算は税収分でしか組めなくなります。今の半分です。特別会計（財投など）の原資もなくなっていますから、官の経済（GDPの45%を占めていた）もなくなります。経済は大幅に縮小します。

国家予算が従来の半分ということは、国体を維持するのがやっとで、国民のサービスは無くなります。社会保障も教育も制度は残っていたとしても、実質はないでしょう。

年金が消える

私は、今の体制（社会、政治、経済の枠組）が壊れた後は、明治維新のときよりも大きな変化があるのではないかと思っています。明治の時は、武士という階層が一つ消滅し、着るもの食べるものまで変わってしまいました。

放射能の蔓延(大量死)と、国家財政破綻が両輪で進行する今、次の世の価値観（社会観、人生観）を再構築しなければなりません。新しい価値観に対応できない古い概念の人は精神を犯されて廃人同様になるでしょう。

国家が国民を養うことができなくなる時代になるのだから、年金も消えます。公務員や企業での終身労働をしても、退職後は無保証となります。ならば、**年金が無かった時代の暮らし方、つまり拡大家族を構成して相互扶助の暮らし方に入っていくしかありません。**

しかも、放射能が及ばない安全な土地に生産手段を求めて移住するしかありません。そして移住した人たちがコミュニティという暮らし方を始めるしかないのです。

ロシアに学ぶ

ダーチャがロシアを救った

ロシア人の「ダーチャ」は郊外に住宅付の自給農園を持つ生活です。

この暮らし方は、政治的な理由から生まれたものです。ソ連建国の公約であった土地の再配分が実行できなかったので、政府が矛先をかわすために人々に小さな菜園(約250坪)を与えたのが始まりです。

ダーチャの本来の意味は、「別荘」ということらしいですが、実際のダーチャの生活は、手作りの住宅であり、電気は引かれていませんし、水は沢水や井戸という自給自足の生活です。ソ連時代から、週末になると自分のダーチャに移動し、自給自足の生活をするスタイルが定着しました。90年の歴史があります。

この生活を参考にする価値があるのは、国家の破産にも耐えられたという実績があるからです。北朝鮮では、たくさんの人が餓死していますが、ロシアの場合、国家が倒産し、給料は未払いが続き、電気は止まり、猛烈なインフレ(10年で物価は6800倍になった)で年金制度は破綻したのに、餓死者も出ず暴動も起こらなかったのです。

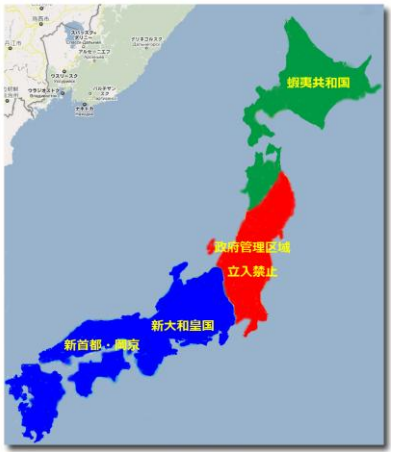
ソ連経済の崩壊と共に、ロシアの人々は、ダーチャの生活の方に生活ベースをシフトしたのです。その生活は、摂理に近い生活(人為の少ない生活)であったので、人為世界がどうなろうと大きな影響はなかったというわけです。

衣食住をつくる

また、近々ハイパーインフレが発生するとすれば(これもほとんど避けられない)、ロシアで起こったように全員が無年金者のようになります。ハイパーインフレが起これば、その後20年ぐらいは年金生活という生活スタイルはなくなるはずです。

ロシアの国家崩壊を救ったのがダーチャ(自給用の農園)でした。ソ連は国民の9割が穀物以外 は自給している農業国でした。いま、日本の自給率は3割程度。それもカロリーベースで、都市圏では実際の食糧が手に入る可能性はゼロに近い。

先が全く見えない時は、原点に帰っておくのが一番確かであって、それは衣食住を自分で作り出せるようにしておくことです。そして、共同で暮らせるノウハウを持っていればさらに安心でしょう。



だれかに頼るのではなく
あなたが、
柱になるために。

アセンション実践倶楽部 資料 2013年8月現在

※参考文献
まとめるにあたり、心紀ヒューマン計画様 くもの糸 を参考にさせていただきました。